

『復興県土づくりシンポジウム』を開催！（続編）

県土整備企画室

平成 25 年 2 月 7 日から 8 日にかけて、『復興県土づくりシンポジウム』を開催しました。先月号で講演及び応援職員による発表概要を紹介しましたが、今回は本県職員の発表概要を報告します。

国際リニアコライダー（ILC）について 政策地域部政策推進室 大久保主任主査



大久保義人主任主査

県では、東日本大震災津波からの復興の象徴として、国際リニアコライダー（ILC）の誘致を目指していますが、政策推進室の大久保主任主査からは、本県の取組状況等について発表がありました。

ILC を核とした東北の将来ビジョンや ILC を東北で実現する意義をはじめ、国際科学技術研究圏域の概要として、中核研究拠点や交流居住地区のイメージなどについて説明があり、聴講者が ILC をより身近に感じられる発表となりました。

下水汚泥焼却灰と戻りコンクリートを利用した路盤材の開発 下水環境課 佐藤技師



佐藤佳之技師

下水環境課の佐藤佳之技師は、下水汚泥の約 7 割を占める汚泥焼却灰と建設現場で発生する戻りコンクリート（出荷後、アジテータ車内に残り、帰社する生コンクリート）の 2 つ廃棄物を混合し、路盤材を開発する実験結果等について発表しました。

度重なる実験結果から、混合固化物が路盤材として利用可能との結果を示すとともに、今後、被災地で多量に発生する戻りコンクリートとガレキ焼却灰の有効活用の可能性も提案しました。

中尊寺通りにおける景観に配慮した電線地中化と歩車共存の道路計画について 一関土木センター 本間主査



本間崇志主査

平成 23 年 6 月に平泉の文化遺産が世界遺産に登録されましたが、一般県道平泉停車場中尊寺線「中尊寺通り」の電線地中化は、この世界遺産の価値をより一層向上させる効果が期待されます。

一関土木センターの本間崇志主査は、景観整備の方針として、参道らしい“奥性”の演出、快適に歩行する 3 地区の“連続性”、適切な“お休み処”等を示したうえで、舗装や道路照明等の各施設の整備方針について説明しました。

田瀬大橋の吊材損傷と応急復旧について 花巻土木センター 川崎主任



川崎努主任

平成 24 年 1 月、一般国道 283 号田瀬大橋の吊材が破断し、通行規制を余儀なくされました。同路線は花巻市と釜石市を結ぶ幹線道路で、県の復興計画で復興支援道路に位置づけている路線です。

花巻土木センターの川崎主任は、この吊材損傷の原因の推定や応急復旧までの手順等について発表しました。短期間の通行規制で復旧できたのは、市中在庫による応急復旧と本復旧を分けて進めたことにあると当時の状況を振り返りました。

さらに頼れる「道の駅」へ！！～みんなの安心スペースを目指して～ 道路環境課 佐藤主査



佐藤充弘主査

道の駅は、東日本大震災津波の際、施設そのものが被害を受けながらも、緊急避難者の受け入れや被災地の救援基地などの役割を果たしました。道路環境課の佐藤充弘主査は、震災を受けての道の駅の新たな課題と対応策等について発表しました。

発表の中では、自立型電源の確保や情報提供設備の強化、トイレ施設の強化などを強化すべき項目として挙げ、道の駅「遠野風の丘」における現在の検討状況について説明しました。

ワークショップを活用した橋梁付属施設の景観整備 県南広域振興局土木部 今野技師

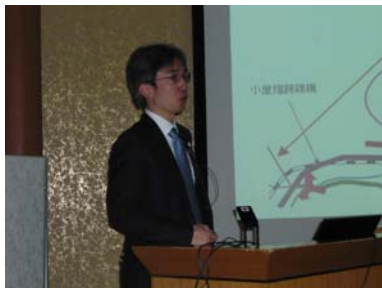


今野弘雄技師

県南広域振興局土木部の今野弘雄技師からは、一般国道 397 号小谷木橋架替えに伴う景観検討について発表がありました。

今年度は詳細デザイン検討委員会とワークショップを立ち上げ、ワークショップでは地域住民や中学生の意見等も取り入れながら、バルコニーや橋詰広場などの検討を行っています。今年度の成功の鍵として、ファシリテーターの活用のほか、現場調査によるスケール感の体感することなどを挙げました。

国道 282 号の冬期安全確保について 岩手土木センター 鶴巻主任



鶴巻武人主任

岩手土木センターの鶴巻武人主任は、平成 22 年 12 月 31 日の豪雪により国道 282 号荒屋新町地区（八幡平市）で最大 15km の渋滞が発生したことを受け、冬期の安全対策について発表しました。

当該地区は、人家連担部のほか地形的な制約のため現道拡幅やバイパス整備も困難となっています。発表では、渋滞の原因が堆雪による大型車のすれ違いができないことなどにあるとして、ロータリー式一方通行による除雪の手法や想定される効果を提言しました。

「遠野が結ぶ復興への道」推進事業について ～遠野かっぱロードと遠野かっぱ工事隊～ 遠野土木センター 及川主査



及川郷一主査

建設業協会遠野支部は、震災直後から約半年間、釜石市や大槌町のガレキ撤去作業や行方不明者の捜索などの活動を続けてきました。

遠野土木センターの及川郷一主査は、これらの活動が広く知られていない現状から、建設業界のイメージアップの重要性を説き、遠野かっぱ工事隊と遠野かっぱロードの誕生について発表しました。これらの活動は、建設業界や遠野のイメージアップだけではなく、建設業協会のモチベーションの向上にもつながっています。

復興県土づくりシンポジウムは、県土整備部に応援職員として派遣されている青森県や埼玉県などの派遣元の職員にも御案内し、聴講していただきました。

出席者からは「震災からの復旧・復興の取組をはじめ、岩手県の実情を知る良い機会になった」とのコメントもいただきました。今後もこのような取組を通じて、本県の情報を発信するよう取り組んでいきます。